

## 中学校における物語創作の方法と意義 (2)

—ライティング・ワークショップを用いた授業の構想—

山本 茂喜・川田 英之\*・大西 小百合\*  
(国語教育) (附属坂出中学校) (附属坂出中学校)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

\*762-0037 坂出市青葉町1-7 香川大学教育学部附属坂出中学校

### The Method and the Meaning in order to Product Stories in Junior High School (2): Writing Workshop Using the Design of Classes

Shigeki Yamamoto, Hideyuki Kawata\* and Sayuri Onishi\*

*Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

*\*Sakaide Junior High School Attached to the Faculty of Education, Kagawa University,  
1-7 Aoba-cho, Sakaide 762-0037*

**要 旨** 2011年度から実施されている学習指導要領国語科では、新たに「創作活動」が重視された。そこで、ライティング・ワークショップの手法を取り入れた物語の創作活動を行い、その有効性を実践的に検証する。さらに、「創作物語を書く」方法としてだけでなく、「発信」と「コミュニケーション」としての、また「読みの変容」としての意義についても提案する。

**キーワード** ライティング・ワークショップ 「作家」の視点 欠損と補充 読みの変容  
コミュニケーション力の向上

#### はじめに

学習指導要領国語科では、新たに「創作活動」が重視されている。しかし、どのように学習を進めていくのか、どう評価していくのかの記述は少なく、曖昧で定かではない。

本小論では、中学校においてライティング・ワークショップの手法を取り入れた物語創作活動の実践<sup>1</sup>の結果を分析し、検証する。さらに、創作活動の、創作にとどまらない新たな意義についても考察するものとする。

#### 1 実践の成果

##### (1) 授業全体から

シャトル学習後のアンケートでは、「学習の探究活動に達成感を感じていますか」の問いに対し「4 (ある) 17名 3 (少しある) 16名, 2 (あまりない) 2名, 1 (ない) 1名」という結果であった。「4」「3」を併せて91.6パーセントの生徒が達成感を感じている。その理由として「けっこう自分が思っていた以上にできた」「想像以上に長い文章を書くことができた」「楽しくいっぱい書けた」といった書き終

えた達成感を書いた生徒が29名と理由のほとんどを占めた。また「文章力が確実に上がった」とスキルの向上を理由として挙げた生徒も1名いた。「小説を書くというのは初めての体験で、作家の人はこんなに苦労して面白い話を書いてるんだなと思ひ、すごいと思った」というように、作家としての立場での面白さを書いた生徒も1名いた。

「2」「1」の理由として、「小説ができていないのでまだ味わっていない」など、アンケート時点で完成できていないとする理由がほとんどであった。(その後、2名を除いて完成させた。)

「どんな学び方が身に付いたのか」という問いに対しては、「たくさん書く、集中」「アイデアを出したり文章をまとめたりすること」「イメージを文章にする力」といった書く上でのスキルを理由に挙げた生徒が29人と最も多かった。また「話し合うこと」「言葉を使って説明すること」とコミュニケーション力の向上を理由に挙げた生徒が5人であった。

ライティング・ワークショップを取り入れた成果であると言えるだろう。

## (2) 小説の完成

資料1は、最終的な生徒作品の内容である。38名中、小説が完成した生徒は36名、完成できなかった生徒は2名(内1名は欠席がちで講座の参加がなかった)であった。

小説が最終的に完成できなかった生徒kの理由は、「アイデアは浮かんだが書いても完成できなかった」というものであった。この生徒は、学習前、「小説というものに対して「話が長い」と答えていたが、学習後は「読むと楽しいもの」と答えている。また、「書く」ということに対して、学習前は「嫌い」と答えていたが、学習後は「だんだんむちゅうになってくる」と答えている。kは最終的に完成はできなかったが、創作の過程において、楽しさを味わったり、自己の認識の変容を自覚できたりしたものと思われる。

作品が完成した生徒36名中、27名が、「問題(欠損)」と「解決(補充)」の構造を踏まえた

作品となっていた。分かりにくいものは6名、構造を踏まえていないものは3名であった。

分かりにくい6名の作品を見ると、まず生徒Mの「ゲルコフの城」は、クラスメートからいじめられている主人公が不思議な世界に迷い込む作品である。「いじめ」という問題は解決しないものの、解決に至る雰囲気醸成しだし「これからどうなるのか?」と思わせる所で作品が終了している。これは、あいまいな結末を工夫しているものと考えられる。生徒Dの作品も同様にあいまいな結末を工夫している小説となっている。

また、生徒Vの「桜町物語」は主役とその周りを取り巻く人々との楽しく心温まるショートストーリーで構成されており、大きな事件が起きるわけではない。しかし、分かりにくいものの、欠損と補充が自然に物語に溶け込んで、読み取りにくいものである。生徒F、K、Yの作品も同様に、欠損と補充が物語に溶け込んでいるものである。

構造が踏まえられなかった生徒のうちJは〈前編〉とあるように、事件が起こるまでのことで、「解決(補充)」に至る前で終わっており、時間が足りなかったためと考えられる。生徒dは、推理小説を書いており、最後まで犯人が分からない仕掛けで、「問題(欠損)」と「解決(補充)」をわざと破ったと考えられる。また、生徒Iは、桃太郎のパロディである「いちご太郎」という話で、ハッピーエンドでは終わらず、わざとアイロニーを利かせたブラックユーモアの小説を書いている。これも、「問題(欠損)」と「解決(補充)」の構造を意識して破ったと考えられる。

そもそも、「問題(欠損)」と「解決(補充)」の物語の基本構造は、民話を素材としたシンプルな物語を基本とした構造モデルである。よって「分かりにくいもの」6名、「踏まえられなかったもの」3名も、「物語構造を踏まえていない、理解していない」とは言えない。よって、本実践で学ばせたかった物語構造のスキルは、ほぼ全員が学び、獲得することができたと考えられる。

物語の基本構造を踏まえた典型的な創作となった生徒Nの小説の全文を資料2に示す。

### (3) 読解力の向上

シャトル学習第8時の基礎編<sup>2</sup>終了時に共通して小説「いちご同盟」(三田誠広)を全員に配布し、読むように勧めた。第9時の実践編で小説を書き始める前に、生徒に一読後の感想を書く課題を出した。また、小説を書き終えた後に「『いちご同盟』を作家の立場から再度読んで、新しい気付きを書きなさい」という課題を出した。途中「いちご同盟」の読みの指導は一切行っていない。結果は資料3のとおりである。

最初の感想は全員が内容に関する記述であった。しかし、作家の経験をした後の気付きは、構成に関する記述が34名とほとんどであった。

「ちゃんと文章が、主人公が何かの欠損があってそれを補充するという話になっていた」「心境も直接書き表すのではなく、行動や描写で表していて、工夫している」など、ミニ・レッスンやカンファレンスで学んだ書くスキルが読みに生きていることが分かる。また、「『いちご同盟』以外の小説で作家としての立場からの新しい気付きがあれば書きなさい」という結果を見ても、「ライトノベルの欠損は見つけにくい」「あとで大どんでん返しや伏線をつくることができる作家は初めから話を組み立ててから書いていることが分かった。それはすごいことだと思った」など、ライティング・ワークショップの書く活動が、生徒が読みの新しい視点を獲得させたことが伺える。

PISA2003の結果を踏まえ、学習指導要領国語科「読むこと」も、内容が大きく変わった。中学校学習指導要領国語科の「内容」も、例えば次のように記されている。

〔第2学年〕

(指導事項)

イ 文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てること。

オ 多様な方法で選んだ本や文章などから適

切な情報を得て、自分の考えをまとめること。

(言語活動例)

ア 詩歌や物語などを読み、内容や表現の仕方について自分の考えを述べること。

〔第3学年〕

(指導事項)

ウ 文章を読み比べるなどして、構成や展開、表現の仕方について評価すること。

エ 書いた文章を互いに読み合い、論理の展開の仕方や表現の仕方などについて評価して自分の表現に役立てるとともに、ものの方や考え方を深めること。

(言語活動例)

ア 物語や小説などを読んで批評すること。

このように単に内容を読むだけではなく、表現や構造を読んだり、批評したりする力が求められている。また、読んで考えたことを交流し合って、自分のものの方や考え方を深めることが重視されている。これは、これまでの文学的文章教材の精読中心の読みが、表現や全体の構造よりも内容や心情把握に偏り、形式面の指導が不十分であったことを意味している。

生徒の感想にもあるように、ライティング・ワークショップを取り入れた今回の実践は、実際に書くことで小説の構造や伏線などに生徒が気付き、本当に身に付いたスキルとなる点で、基本的な物語の構造を学ぶ一つの方法を示すものである。

### (4) 認識の変容

生徒は、毎時間の終了時に、「小説」および「書く」ということについての認識の変容について、マップに記述していった。(資料4参照。実際には、記入の時間によって色が異なっている。)

資料5は、「小説」というものに対する認識の変容の結果である。学習前後を比較すると、学習前後を記入した35名中34名に、認識の変容が見られる。(変化なしは1名)。

「小説」について学習後の記述を見ると、「楽

しき」について書いている者が9名、「書き出しや結末」といったスキルについて書いている者が9名。「独特の世界観」といった小説そのものに対する考えや自身の生き方について書いている者が9名であった。また、「書き手がいれば読み手がいる」といった、「作家としての意識」について書いている者も4名いた。また難しきについて書いた者も4名いた。

資料6は、「書く」ということについての認識の変容の結果である。学習後の記述を見ると「好き」「楽しい」といった記述は12名、「難しい」と答えた生徒は15名であった。今回の小説を書くということに、楽しさを感じながらも、苦労を感じたことが伺える。しかし、「すごく難しいけれど楽しい」というように、難しさと楽しさを並記している者も5名いた。アンケートの達成感の結果と併せても、小説を読むだけでは分からない、書くことの難しさを感じた上で、「作品を書きあげた」という満足感につながっていると考えられる。よって「難しき」は、「読み手」から「書き手」への認識の転換として、肯定的にとらえてよいと思われる。

## 2 成果と課題

以上の実践結果の分析により、中学校における物語創作活動において、ライティング・ワークショップの授業方法が有効であると確認できた。それは大きく次の4点にあると考えられる。

- ① 全員が楽しく「書ける」ようになる。
- ② 実際に書くという実の場でスキルを学び、本物の力を身に付けることができる。
- ③ 創造力、思考力を伸ばすことができる。
- ④ 読者を意識して書けるようになる。つまり、「書く」ことを、読者とのコミュニケーションとして捉えることができる。
- ⑤ 生徒が「読み手」から「書き手」へと視点を変え、読むことができるようになる。

①は、佐藤明宏の示す創作活動の意義<sup>3</sup>の「ア自ら表現しようとする意欲を育てる」「イ

表現することの喜びを知る」にあたる。また、②は「ウ 文章表現力（取材力、構想力、構成力、レトリックを使う力など）を伸ばす」に、③は「エ 想像（創造）力を伸ばす」「オ 思考力を伸ばす」にあたる。さらに、③と④は、「カ 多角的なものの見方や考え方、客観的視点を身に付ける」「キ 省察力を伸ばす」にあたる。これらを協同的な学びとしての実の場で、自然に習得させているシステムが、ライティング・ワークショップであると言える。

また、④と⑤については、従来の「一つの作品の視点を替えて読む」といった枠を超え、他の作品の読みにも転化しやすいといった意義が認められた点は大きな意味がある。

さらに、ストーリーマップ<sup>4</sup>を用いて学ばせた「問題（欠損）」と「解決（補充）」の構造は、物語や小説のみに限定されるものではない。説明文やプレゼンテーションといった力にも、応用できるものである<sup>5</sup>。

本実践後、筆者は第1学年において「江戸からのメッセージ—今に生かしたい江戸の知恵—」（杉浦日向子、光村図書1年）を教材に、江戸時代の生活について調べ、意見交換し、「江戸の知恵に学ぶ」と題した最終意見文を書く単元学習を行った。次に示すのは、生徒Eの意見文の一部である。

使える物を捨てるのは心の汚れ

使えるものを捨てていないだろうか。壊れてもいない物を新しいのが出たからと言って捨てていないだろうか。今はゴミが多い。だが昔、具体例を出すと江戸時代ゴミは驚く程少なかった。（中略—以下江戸時代の具体例を列挙—）こんな小さい事でも皆がすると大きな事になる。プラスチックなど便利な物が増える一方で物を大切に作る心、改めて江戸の心が少なくなっているのではないかと思う。みんながやれば小さい事でも、必ず大きな事になるのではないかと思う。私は、大人になっても、江戸の心を大切にしたい。

下線部のように、初めに問題（欠損）を示し、

具体例を示しながら解決（補充）するという構成の意見文になっているのである。ミニ・レッスンで取り上げた「書き出しの工夫」の表現も見受けられる。

次に、学力はEと同程度で、シャトル学習を行っていない生徒の意見文の例である。

#### 江戸っ子に学ぶ

江戸っ子達は、みんなで助け合い、リサイクルをするという生活をしていました。

江戸っ子の暮らしは豊かではなかったため長屋に暮らしていました。長屋では、自分たちに与えられた空間の中で、みんな助け合い支え合いながら生活していました。（中略—以下江戸時代の具体例を列挙）

このような江戸っ子の生活から学び、それを現代の生活にも生かしていけば、よりよい生活ができると思います。

ほとんどの生徒の意見文が、この生徒のように「調べたこと（情報）」と「思ったこと（意見）」で構成された意見文となっていた。

1学年全体の意見文提出生徒を、「問題（欠損）→解決（補充）」の型の意見文になっているかどうか分析した結果は次のとおりである。（1学年のシャトル学習選択者13名の内、欠席による2名は除く。）

シャトル学習選択者	7名/11名 (64.6%)
その他の生徒	25名/83名 (30.1%)

本実践はシャトル学習終了4ヶ月後の実践であり、授業でも特に物語構造については單元の中で押さえてはいない。もちろん「問題（欠損）→解決（補充）」は教科書の説明文教材に通常使われている型であり、それを真似ることで「その他の生徒」の中でも使える生徒はいた。しかし、対象数が少ないとはいえ、シャトル学習選択者の割合が高いことは一つの成果である。

また、本講座を選択した生徒Gとeは、他1名の生徒とチームを組み、本校の総合学習「CAN」で、「音楽と計算力の関係」について

調査し、発表した。以下はそのプレゼンの内容の一部である。

私たちのCANは、音楽を聴きながら勉強をする、いわゆる「ながら勉強」についてしらべたのですが、ながら勉強は、批判の対象となりやすいのです。一体なぜなのでしょうか？ それには、きっと理由があるはずです。ですが皆さん、考えてみてください。スポーツ選手は、試合前などに、よく音楽を聴いています。ということは、音楽には、集中力を高める効果があるのではないか、と私たちは考えました。

（中略—以下実験結果を説明する）

実験には、個人差による誤差がつきものです。そして、この実験結果から受け取る印象や結果そのものも大きく変わってきます。いくら大勢で実験したからといって、完全に「ながら勉強」がいけないということを否定できるわけではないのです。ただ、今回の実験では、今まで言われてきた否定的な意見と正反対の立場の結果が出ました。結果に個人差があるとすれば、書くなくとも「ながら勉強」がいけないということは一概に言えないのです。

（以下略）

下線部からは、「問題（欠損）→解決（補充）」の構造を踏まえた説明が見て取れる。筆者が二人にインタビューしたところ、物語構造を学んだことが役に立ったということであった。

これら結果は、創作活動を単に「書くこと」ととどまらない、さらなる可能性を示していると言えるだろう。つまり、今回の物語創作の実践が、別の「書くこと」や「話すこと・聞くこと」の力を伸ばすことにつながったのではないかという点である。

今後の課題の大きな点として、実際に書けなかった1名の生徒の存在が挙げられる。5(2)でも述べたが、この生徒は書く意志は持っており、書くことの楽しさも味わったのだが、最終的に書くことができなかった。やはりこれは「物語・小説」に限定したからとも言えるのでは

ないか。他の多くの生徒が「難しい」と答えた部分をいかにクリアしながら同じ成果を求めていくかが今後の実践の課題である。例えば、小説に限定せず、本来のライティング・ワークショップにあるように、童話、随筆、ルポルタージュ、評論など、ジャンルを「選択する自由」を認めれば、より成果も挙がったのではないかと考えられる。

また、先に示した、創作にとどまらない力の獲得についても、さらなる実践研究が必要である<sup>6</sup>。

そうした課題の検証等については、別稿に譲ることとする。

#### 注

- 1 山本茂喜・川田英之・大西小百合「中学校における物語創作の方法と意義（1）ーライティング・ワークショップを用いた授業の構想」『香川大学教育実践総合研究 第25号』香川大学教育学部附属教育実践総合センター、2012、9月、1～12頁
- 2 注1に同じ。11頁資料1の単元構成参照。
- 3 佐藤明宏『自己表現を目指す国語学力の向上策』明治図書、2004、54頁
- 4 注1に同じ。11～12頁参照のこと。
- 5 例えば、プレゼンテーションの名人と言われたスティーブ・ジョブズは、そのポイントの一つを「一番大事な問いに答える」としている。一つの重要な問題を聴衆に投げかけ、それを解決してみせるのがプレゼンテーションだと言うのである。カーマイン・ガロ『スティーブ・ジョブズ 驚異のプレゼン 人を惹きつける18の法則』日経BP社、2010、44～46頁
- 6 例えば三藤恭弘は、物語創作過程の中で「現実」と「空想」との往還運動が行われることで認識力が高まり、「子どもたちの現実生活を創造的に変革していく源となり、あるいは現実生活の中で解消しきれない思いを発散させるカタルシス効果・セラピー効果を生む」としている。こうした教育的効果についても今後の検証が必要である。三藤恭弘『書く力がぐんぐん身につく「物語の創作／お話し作り」のカリキュラム30』明治図書、2010、31～35頁

資料1 小説創作結果

生徒	題名	内容	欠損→補充
A	タイム・トラベラー	友人を救えなかった主役が異世界での体験を通し、友人を救おうと決意する	○
B	死鳥	無人島に行った主役の周りの人が次々殺されていき、最後は自分でゲームを終わらせる	○
C	命の花	飛行機事故(事件)で父を亡くした主役が犯人を捜す内に命の大切さに気付く	○
D	夏の思い出	嫌な女子2人と4人グループでキャンプをすることになった主人公が、1週間ともに過ごすなかで仲間に仲間意識にめざめていく	△
E	トモダチ?	いじめに遭った主役が、仲間力で立ち直る	○
F	魔心	魔女と猫が関わる三つの話	△
G	私の想い	誰にも必要とされていないと感じる主人公が草食男子の転校生に出会って変わっていく	○
H	鏡の中の世界	人間世界に絶望生きる意味を失った主役が鏡の世界で生きようと思う	○
I	Every DAY	過去にいじめられた主役が、その相手と付き合う中で恋する気持ちに気付く	○
J	やしき事件(前編)	主役が旅行に行った先で、殺人事件に巻き込まれる	×
K	ナイフ	兄弟を殺された主役が、犯人に復讐の後、自分の命を絶つ	△
L	命の花	両親を殺された主人公が、不思議な世界で対役に会い、命の大切さを気付く	◎
M	ゲルコフの城	クラスメートからいじめられている主人公が不思議な世界に迷い込む	△
N	私とわたし	児童保護施設にいる「私」が藤時菜世界でもう一人の「わたし」に出会い、自分の生きている意味を知る	◎
O	一流悪党	戦うことしかできない少年が戦争の中で姫と出会い、戦う意味を知る	◎
P		(講座ほぼ欠席のため未提出)	
Q	記憶のない幼なじみ僕は手をさしのべた	将来に悩む主人公が、記憶をなくした幼なじみに出会い、将来の道を見付ける	◎
R	雑用係の仕事	小説家と雑用係の女性、刑事とその先輩刑事の4人が協力して殺人事件に挑む	○
S	ハタレ侍	村の厄介者「ハタレ侍」が村の危機を救い、誇りを取り戻す	◎
T	Squaraの法則	自分の名前が嫌いな二組の双子が出会う中で、次第に名前を、自分を好きになっていく	○
U	農村ライフ～夏花	毎日に退屈している主役が農村生活によって自分を取り戻していく	○
V	桜町物語	主役とその周りを取り巻く人々との楽しく心温まる出来事	△
W	つながっている	死んだ主役が地獄から人間世界に戻り、愛と生きることを意味を知る	◎
X	捜一の星	刑事である主役が16年前の殺人事件を解決する中で、犯人(友人)との友情を取り戻す	○
Y	ブリキア	2011回めのブリキアに選ばれた4人の中学生が悪の組織と戦い、友情の大切さをかみしめる	△
Z	私の条件	めんどろくさの主役が秋月を好きという気持ちに気付く、がんばろうと思う	◎
a	マスコットの日常	自分の存在意義がわからないフーくん2人の友達生き方に触れ「当たり前の幸せ」を知る	◎
b	ヒーロー	ひょんなことから不死身の体になった主役が死にたいと思いながら、出会った病気の少女のために奮闘する	○
c	あの花の咲く丘	自分の将来に悩んでいた主人公がふと手にした「スイッチ」で担任の先生を殺してしまう。皮肉にもそのことがきっかけになり自分のやりたいことを見つけていく	○
d	チェーンメールの犯人探し	警察官でありながら、偽のチェーンメールをうつ主人公だが、本物のチェーンメール殺人が警察署内で起こり犯人を探していく	×
e	MUKOU	主役の少年が恋人の父親を殺した犯人を捜す内、それが自分の母親だと知る	○
f	画家になった私	画家になる夢をもって上京したのにまだ悩んでいる主人公が、ある絵を見たことで画家になる決意を固める	○
g	私の命	余命少ない「私」が和馬と出会い、「生きていく」意味を知り、生きていく	◎
h	Best Friend	ピアノの夢を捨てた主人公が友達力でピアノを再び弾こうと決意する	◎
i	Dream World	主役が夢の中でいじめ自殺した友人に会い、自らの過ちに気付く	○
j	たたかい	主役達が不思議な世界で飛鳥とともに竜とたたかう中で飛鳥を「好き」という感情に気付く	○
k		未完成	
l	いちご太郎	いちごから生まれた主役が鬼退治に失敗する	×

◎はっきり分かる  
○分かる  
△分りにくい  
×なし

資料2 生徒Nの創作した小説(全文)

「私とわたし」 作 生徒N

あの日、誰かが言いました。  
みんなちがってみんないい  
もう忘れてしまった言葉です。

1 はじまり  
人形はつくづくかわいそうだと思う。この世に生を受けたときからずっと笑い続けなければならないからだ。泣いたり笑ったりすることなく、ずっと同じ表情で。  
私も人形だった。ずーっと昔から。  
「おーい。早くこいよー」  
少し前から私と、それから隣にいる久美子と呼ぶ俗の声がした。  
久美子と俗、それから私は仲良し三人組だ。私以外はそう思っている。  
俗の声に、私は苦笑をもって返す。いつもの人形の私が。  
私の人形になったのは六年前、八才のときだった。  
その日私は市内の児童保護施設に引き取られた。母が死んだからだ。父は私が小さいときに死んでいたの、私には母しかいなかった。

その瞬間から、私の心は喜びというものを作らなくなった。普通の人がおおよそ感じるものがよく分からなくなった。でもそうやって保護施設で過ごしていたら、突然二人に質問攻めにされた。どうした、どこか痛いのか、大丈夫か、と。その日から私は人形になることを決めたのだ。今、私の目の前では伶と久美子が仲良く話している最中だ。私はこの二人を見ながらなぜいつもにこにここと笑うことができるのか、冷めた心の中で思っていた。この二人のことを私は理解できなかった。

久美子は小さい頃、親の暴力にあっていた。それがだんだんとエスカレートしていき、このままいくと本当に大変なことになると思った祖父が警察に通報して久美子はここに来ることになったそうだ。それが三才の頃。十一年たった今でもそのときの傷痕が消えずに残っている。なのに久美子は大人達にも普通に接しているし、親もウランではないと言うのだ。

一方伶の方はあとわずかしか生きられない。余命が三年。たった三年だ。なのに彼は絶望してはいないし、あと少ししか生きられないことを嘆いている様子もない。

私にはそのことが、二人がどうしても理解できなかった。でも私は悩んでも分からないだろうと思い、二人は私と違うんだ、と結論づけてすますことにしていた。

「おい、大丈夫かー」  
伶がこちらを向いて妙に間のびした声で聞いてきた。どうやら二人の話し合いは終わったらしい。

「大丈夫だよ」  
私は嘘くさい笑みをほりつけて言った。  
本当、こういうのだけはうまくなったよな……。  
「そうか。じゃ、今日は玉川に探検に行くことになったんだけどそれでいいか？」

「うん。いいよ」  
彼、伶は年齢に似合わずあちこちに探検に行くのが大好きだ。休日はもちろん、学校のある日でも時間があればいろいろなところを探索している。

「本当にいいの？」  
久美子が小声で心配そうに聞いてきた。  
ああ、本当に久美子は優しい。彼女は知っているのだろう。玉川のある土手、そこは母と私の思い出の場所だった。でも私にはその優しさは不要だった。こうして二人をだまして私に優しくしてもらう資格は無いからだ。

だから私は笑ってこう言った。  
「うん」  
☆☆☆  
土手についてから二人はいろいろな場所を探検しに行ってしまった。伶が久美子を強引に引っぱって行ってしまっただけなのだが、伶はいつもそうだ。私達の意思なんて無視して強引に押し切ってしまう。その行動力だけを見れば誰も伶が病人で、それもかなり悪い、などとは思わないだろう。

だから私達はいつしか抵抗することをやめ、伶につきあってあげることにした。伶はもちろん私も誘ってくれたのだが私はここにいる、と断つた。いつもはけっこう強引で私を無理やり引っ張って行く伶なのだ。今日の私に何かを感じたのか、それとも久美子だけでもいいと思ったのか、素直に引き下がった。

二人を見送った私は、彼らが見えなくなると、グロンと雑草が生えているその場所へ寝転がった。ここは斜面になっていて、下を見ると澄んだ水が流れる川、玉川を見ることが出来る。

ここへ来たのは母が死んでから行っていないので八年ぶりだった。  
昔、私が一番自分らしくあれしたのは母と一緒にときだった。今は一人のとき。  
一人だったら、自分が人形になることもないし、いつ相手に自分の嘘がばれるかと、びくびくと怯えることもない。  
私は、その土手の少し向うに桜の木が生えているのを見つけた。

もうすこしで咲きそう。だけど咲かない。そんな状態。  
私はふと、母が昔言っていたことを思い出した。  
「あなたはね、柔らかな春風の吹くところに生まれたのよ」  
それを思い出した瞬間、一つの風が通り抜けた。  
私のところは、まだ春の初めの風は吹いていない。けど、今の風は春一番と言うにはあまりにも激しく嵐のようだった。あわてて上体を起こす。

私はあまりの激しさに目を閉じた。胸で顔を隠す。そのくらい寒い風だった。  
目を閉じているとき、一瞬だけ、目の前がピカッと光ったような気がした。

## 2 ハル

激しい風がやんだ。  
目を開ける。  
さっきと何も変わらない。当たり前だったが、今さっき嵐のような風が通り抜けたとは思えないような静けさが。  
ここはさっきの場所とは違う、直感的にそう思った。  
私はあたりをきよろきよ見回す。これといって違うところはない。  
そう思ったところで私はさっき見ていた桜の木に目を止めた。

花が咲いていた。  
激しかったとはいえず、今まで咲いていなかったものが、十秒ほどの風一つで咲き乱れるものだろうか。  
そんなこと有り得ない。  
私は立ち上がってその桜の木の前へと行った。しばらくボーっと見上げている。

「ようこそ」  
声が聞こえた。伶とも久美子とも違う、優しい声だった。どこか母を思わせるような優しい声音だ。  
ただ一つ気になることがあった。声が甲高いような気がする。  
私は声がかしたと思われる方を向いて、一体誰なのだろうと探した。だが、いつまでたってもその姿現れない。  
その代わりとでもいうように、どこからともなくゴロゴロという音が聞こえてくる。何かを転がしているような、そんな音。それと共に、あるモノが私の前に現れた。ベビーカーだった。そのベビーカーは、誰かが押してもいないのにひとりでにこちらへ向かってくる。

この部分だけ聞くと軽くホラーだろう。  
やがてそのベビーカーは私の前でピタリと止まると、もう一度ようこそ、と言った。  
さっき私が聞いた言葉は、間違いなくこのベビーカーから発せられた言葉だったのだ。  
私は迷わずベビーカーの中をのぞいた。怖さなんて無かった。ただ見てみたいと思っただけだったのだ。  
私の、身の毛もよだつような化け物、という予想はあっさり裏切られた。そこにいたのは、なんてことない、ただの赤ん坊だった。よく見れば、その桃色のおくるみに包まれている赤ん坊はくりくりとしたつぶらな瞳で私を見ている。私にはよく分からないが、普通の人だと、かわいい、という類のものじゃないだろうか。

「どうかしたのですか？」



……。

違った。こんなかわいいなんでもんじゃない。見た目は普通だが中身がヤバイという、最悪なバターの奴だった。推定零才の赤ちゃんがこんな言葉を、しかも大人の女の人（二人くらい）のようにはしゃべるはずがない。

ここは現ではない。だとしたら一体どこ……？

その疑問が口をついて出た。

「ここはどこ？」

「さあ、どこでしょうか？」

化物は赤ちゃん特有のしわくちゃの顔にいたずらっぽい笑みを浮かべてそう答えた。

ああ、本当に気持ち悪い。

普段ならここで人の良い笑みでもはりつけて穏便にすませるところだけと相手が相手だ。こんな化物なんかはどう思われようと関係ない。

「私の……夢の中？」

気持ち悪くて仕方がないが、今ここには彼女しかいないのだから聞くしかない。

「あなたの夢の中かも知れません……。皆様の夢の中かも。ここは現でもあり、そして心の内でもあるのです」

のわかに信じられなかった。よく分からない世界に引き込まれるなど普通ではありえない。しかし、ありえないことがおこっているのだ。

彼女の言っていることは正しい。これも直感。確証なんてない。不確かなもの。でも絶対正しい。なぜか私はそう思った。

彼女はここを夢の中だと、心の中だと言っていた。心や夢には自分の願いが、想いが、現れる。ならばもう一度母に会える。

それは私にとって願ってもないことだった。どんなに神に、仏に願ってもあの時に戻ることはできないと分かっていたから。時間は巻き戻すことなどできはしない。だから私の心は一生救われることはないだろう。

そう思っていた。でも母にもう一度会えるなら、それなら。

私は期待に満ちた眼差しでベビーカーの中の彼女をのぞきこんだ。

彼女の顔にはさっきまでのあの笑顔はなかった。代わりに苦しそうな表情があった。何かの悲しみをこらえるような、それでいて、どこか怒っているような、そんな顔。

私は少しだけ目を見開いた。彼女がそんな表情をするなんて思わなかったからだ。と同時に、私ってこんな不思議な化物にも会いたかったのかなあ、とも思っていた。

そう思っていると、あの化物と目が合った。その瞬間、彼女の瞳には明るい光が灯り、あの暗い表情も消え、元の彼女に戻った。さっきのあの表情なんて無かったかのようだった。

ごまかすように彼女が口を開いた。

「何か？」

「えっいや別に」

今のは見てはいけないものだったのだろうか。そう思うと、私はとたんに気まづくくなって目をそらした。と同時に、さっきの桜の木が目にとびこんできた。

今まで見た中で一番きれいだったと思った。なぜかは今は分からないけど。

「とってもきれいですよね」

彼女も同じように思っていたらしい。

「彼らは自分の力で立てて生きているんです」

桜のことを語る彼女はとても嬉しそうに誇らしげだった。

「名前を教えてください」

気づけば私はそう言っていた。

「ハル……と申します」

「ハル……ごめんなさい」

恥ずかしかった。こんなに素敵な彼女のことを化物、気持ち悪いと思っていたことが。

「ハル……サクラのことを教えて」

彼女は少し驚いていたけれど、すぐに笑って、はい、と嬉しそうに答えてくれた。

ハルはたくさんのことを教えてくれた。

彼らには人間のように手足があるわけではない。口があるわけでもない。自由に動いたりできなければ、歌を歌うこともできない。一生そこに芽を出したときから枯れて死ぬまで同じ場所で生き続けなければならないのだ。なんとつまらない一生だろう。だがそれは人間の目に映る姿だった。精一杯生き、子孫を残すためにがんばっているのだ。それは、人間のがんばるとはまた違うのだろう。

ハルは桜から視線を外して辺りを見回すようなしぐさをした。彼女には下にある草花なんて見えないはずなのに、まるで見えているかのようには話す。

「彼らは『今』を生きているんです。過去でも未来でもなく今を」

それは私に向けられた言葉なのだろうか。過去にとらわれている私に対しての。

「最も命の芽吹き季節、それが春です。そして最もつらく厳しい季節が冬です。その冬を乗り越えた—春を迎えた—ものだけがこの喜びを知ることができるのです。そして皆でその喜びを分かち合い、また季節がめぐるまで必死にたえるのです。だからそれを乗り越えた彼らはとても強いんです。」

力なんてなくても、何かをじっとたえ抜くこと、それも一つの強さなのだと。

ハルの言葉を聞きながら私は思った。

だから久美子は強いのか。

小さい頃、どんな仕打ちにもたえてきて、それでも笑うことのできる彼女の姿が彼らと重なって見えた。

この強さは乗り越えたものだけにしか手に入れることはできない。私は手に入れることはできるだろうか。

私は目の前の桜の木に触った。

光があふれて、何も見えなくなった。

☆☆☆

その日は夕方だった。

土手に来ていた私と母はくっついて座って水平線に沈む夕日を見ていた。

そして母さんはそっと静かな声で言った。

「今から母さんの好きな詩（うた）を教えてください。聞くととっても幸せな気分になるのよ。父さんもこの詩が好きだったの。それはね……」

あとはもう、何もわからなかった。

### 3 ナツ

次に私が目を開けると、同じ土手にいた。でもやっぱりどこか違う。そう思っていると、突然後ろから声をかけられた。

「あんた誰」

ずいぶんとぶしつけな声だ。振り返ると、五才くらいの水色の半ソデと半パンをはいた少女が立っていた。

どう答えようか迷っていると、向こうはまあいいか、とつぶやき、

「ねえ、これから面白いことを教えてあげるわ。あつあたしの名前は、ナツ」  
と言って、展開に追いついていない私を強引に引っぱっていく。俗なみの強引さだ。  
私がつれて行かれたところは、あの桜の木だった。だが、桜の花びらはなく、代わりに緑色の葉がたくさんついていた。  
違和感の正体はこれだったのだ。  
夏になっていた。  
そう思えば今もセミが鳴いている。  
このサクラの木にも五匹のセミが木の幹にとまっていた。  
だがこの五匹のセミ。さっきまでうるさいくらいに鳴いていたのに、ナツが現れたら鳴くのを一斉にやめ、彼女の近くまで飛ぶとこれまた一斉に話しかけた。  
「久しぶりじゃん、お嬢」  
「今日はお供のカブトはいないのか？」  
「今ごろお嬢のことを探してんじゃねーの」  
それにナツはまいてきたのよ、と返すと、くると私の方へむいて、  
「紹介するわ。この子達が世界で一番かわいいそうな子達よ」  
と元氣よく言った。  
あまりにもひどい言い草だ。当然セミ側からはプーイングの嵐だ。  
「かわいいそうってそりゃないぞ嬢ちゃん」  
「俺達は世界で一番すごい奴なんだぜ」  
私にも向いているらしい。とんだとばっちりだ。だがナツの方は全然気にしていないらしい。強気な姿勢で言い返す。  
「だってそうじゃない。地上に出てからたった一週間しか生きられないんですよ」  
「そりゃそうだが、だからこそ良いんじゃないか。その一週間、どれだけ有意義に過ごすか、それを考えながら毎日生きてんだぜ。めっちゃ頭使ってたからな。だから、生きられる日数なんて関係ないんだ！」  
そう言い切ったセミに他のセミ達がそうだ、そうだと同意を示す。  
「生きられる日数なんて関係ない。大切なのは限られたその日をどう生きていくか」  
「そうだ」  
つぶやいた私の声に同意する声私の隣から上がった。驚いて隣を見るとカブトムシがいた。  
もう驚かない。ここは夢の中だ、夢の中。  
このカブトムシ、もしかしてナツがまいてきたと言っていた、あのお供だというカブトムシだろうか。  
「あいつはたった七日しか生きれない。それを分かっているはずなのに、誰一人として絶望することもない。ただ前を向いてまっすぐに生きている。それはあいつらがその七日に、たった七日に意味を見つけているからだ。だからあいつらは世界で一番美しい。生きることができる幸せを、ありがたさを知っているから」  
セミと同じだと思った。俺は全く同じ。  
だから俺は美しいんだ。命があまりないことを知っているからこそ、その日を一生懸命に生きることができているから。  
私はゆっくりと桜の木に近づき、そして触れた。  
☆☆☆  
今度は夜だった。私と母さんはやっぱり上手に来ていて、星のまたたく夜空を見上げていた。月のきれいな夜だった。  
私はお母さんにあの詩をせがんでいた。  
お母さんは苦笑してそれから歌い出した。  
「わたしが……」  
また分からなくなった。  
なぜ分からないのだろう。ハルのときもそうだ。なぜ途中で聞こえなくなるのだろうか。分からない。私は一体何を忘れていたのだろうか。

#### 4 アキ

次は秋になっていた。空気が涼んでいる感じがする。  
周りの植物もどことなく元気が鳴く寂し気で、さっきはみずみずしい緑色だったものが青色に変わっているものもあった。  
一年が終わろうとしている。  
次に私の前に現れた女の子は七才くらいで、とても皮肉な子だった。ことあるごとに、私に嫌みを言うてきた。名前をアキと名乗った。  
☆☆☆  
私は母さんと一緒に上手に寝ころんで、草の中にあるスズメシヤコオロギの声に耳をすませながら、母の大好きな詩を聞いていた。私は七才くらいになっていた。  
だけどさっきと同じように聞き取ることはできなくて、そのまま消えてしまった。  
七才の記憶は覚えているものもある。なのにそのことだけは思い出せない。  
あの詩は何なのだろう。  
☆☆☆  
多分、次に目を開けると一面の銀世界の中にいるのだろう。そして次に出てくるのは「フユ」という名の十才くらいの少女。  
ハル  
ナツ  
アキ  
そして、  
フユ  
一年が終わる。  
次で全てのなぞがとけるのだろうか。  
そしたら私はどうになってしまうのだろう。

#### 5 フユ

次に目を開けると真っ白……ではなかった。  
そこに広がっていたのは真っ暗闇だった。  
すぐ先も見えない本当の暗闇。そこは何も、音すらも存在しなかった。  
私はその場から動くことができなかった。  
その時、私の前にほろっと輝く何かが見えた。人だった。この真っ暗闇の中、その人だけがまわりと光っていた。  
その人は全身を黒いフードですっぽりとおおっていた。身長は私と同じくらい。男か女かも分からなかった。その人は私をじっと見ているようだった。  
「フユ？」  
その人は答えなかった。  
沈黙が続く。

おもむろに、その人がフードに手をかけて、それを外した。現れた顔を見て私は驚きのあまり固まってしまったかのように動けなくなってしまった。

フードの下にあった顔、それは私によく似ていた。いや、似ているなんてものじゃない。私だった。

すぐ目の前にいる私は無表情で、その目には何も映ってなくて。本当の私のような感じ。驚くことも泣くこともない感情のない本当の私。

私は意を決して口を開いた。

「どうしたらここから出られるの？」

その問いに彼はすくには答えなかった。しばらく私を見つめたあと、

「おまえが変われば」

抑揚の無い声でそう言った。

分からなかった。変わるとはどういうことなのか。何が変わればいいのか。

だから私はそれを口にした。

「分からない。あなたの言っていることが私には分からない。一体私はどうしたらいいの？」

「なぜ気づかない！」

突然の叫びに私は息をのんだ。彼女は肩を震わせて、目を怒りでぎらぎらと光らせながら、こぶしを握りしめて私をにらみつけていた。

そして彼女のその叫びは、自分の中の怒り、悲しみ、全ての感情を含んだ激しいものだった。

彼女の叫びは続く。

「なぜ！なぜお前は前を見ようとしなくて、逃げ続けることしかできない。後ろしか見ない。前を向くことの大切さを、じっとたえぬくことの大切さを今まで教えてもらってきたのじゃないのか！」

「だからそれを超えたものはとても強いんです。」

「だからあいつらは世界で一番美しい。」

「なぜまだ分からないんだ。お前の母がお前に残してくれたものは、すぐ忘れてしまうようなちっぽけなものだったのか……」

唐突に頭の中ではじける記憶。それは暗闇にさす一すじの光のようだった。

なぜ今まで忘れていたのだろうか。なぜ思い出せなかったのだろうか。母と私の一番大切な記憶を。

あるときは沈む夕日をながめながら、また、あるときはきれいな星空を見上げながら母は私にあの詩（うた）を教えてくれた。

わたしが両手を広げても  
お空はちっともとべないが  
とべる小鳥は私のように  
地面をはやくは走れない

わたしがからだをゆすっても  
きれいな音は出ないけど  
あの鳴るすずはわたしのよう  
たくさんの歌は知らないよ

すずと小鳥とそれからわたし  
みんなちがってみんないい

「人は皆それぞれ違うわ。それが当たり前。でも、それは自分と違っているということではないのよ。それは、一人の個性なの。個性があるからこそ、一人一人が輝くことができるのよ」

「みんなちがってみんないい」素敵な響きでしょう」

「この世にはどうにもできないことがある。それに絶望して立ち止まって進めなくなることもあるかも知れない」

目の前の私は言った。その目にはさっきの怒りは無かった。ただ淡々と私を諭すように言う。

「でも人は皆、それを超え進む勇気をもっている。だが皆が皆進めるわけじゃない。立ち上がろうと乗り越えようとそう思ったものだけが進むことができるんだ」

「俺と久美子は乗り越えることができたんだ……」

私はやっと俺と久美子のことを理解することができた。

「大丈夫。どこでだってお前のことを理解してくれるやつはいる」

だんだんと彼女の姿がまゆりしていく。

「ありがとう」

ハルに、ナツに、アキに、そして、目の前の私に、感謝の意を込めて頭を下げた。こし

大切なことに気づかせてくれて、ありがとう。

## 6 おわり

私が目を開けるとそこはもとの場所で寝転んでいる私を、いつの間に戻ってきたのか、俺と久美子が見下ろしていた。

「お前起きるのおせーよ」

「さっき俺と一緒に面白い場所見つけたんだ」

「ってことで行くぞ」

それはいつもの俺と久美子で、それがなぜか今の私にはおかしくて、私は小さくすっと笑った。

それを見た二人は、

「なんかお前いつもとちがうなー」

「そうそう。自然な感じがするよね」

私は目を開いた。

「どんな場所だってあなたをちゃんと見てくれる、個性を認めてくれる人は必ずいるわ。そしてそれは意外と身近にいるものなのよ。」

昔、母に言われた言葉だ。そして、さっきも一人の私にも言われた言葉。

少し先で二人が早く、早く、と私を呼んでいる。

いつもの日常。いつかこの日常はくずれてしまうかもしれない。永遠なんてないから。私と母のように。

でもこの笑顔は、想い出は、永遠に存在する。私と母のように。

私は二人が待っている場所へ駆け出した。

心の底からの本物の笑顔で。

視界の端に映ったあの桜の木は、いつのまに咲いたのか、満開の花びらがひらひらと舞っていた。

—「みんなちがってみんないい」  
ねっ素敵な言葉でしょ。

(引用 「わたしと小鳥とすずと」 金子みすゞ)

### 資料3 「新しい気づき」 アンケート結果

A 「いちご同盟」を作家としての立場から再度読んでの新しい気づき

【内容に関すること】 2

- ・ 僕は直美がすごく好きだった。直美も僕が好きだった。
- ・ 命の大切さについて伝えてくれるよい本です。

【構成に関すること】 34

【設定】 1

- ・ 主人公の設定が大変

【構成】 6

- ・ あれだけ長い物語を書くにはどれくらい時間がかかったのだろう。ちゃんと起承転結になっていた。
- ・ ちゃんと文章が、主人公が何かの欠損があってそれを補充するという話になっていた。
- ・ 欠損の部分とか、夢とか、かつ藤の部分がよく分かる。
- ・ 文の構成がうまくて、次のページが気になるようになっている。
- ・ ハッピーエンドとバッドエンドの間を行っている。

【題名】 9

- ・ いちご同盟の題名を考えるのは大変だったと思う。
- ・ いちご同盟の「いちご」とはただ単に「いちご」ではなく「15歳」という意味があった。
- ・ いちご同盟の「いちご」の意味が15才みたいなのはすごいです。ただ読んだだけでもすごいなあと思ったけど、自分で話を書いていると私はこんなアイデア思いつかないのですごいです。
- ・ いちご同盟という本は「一五同盟」という意味もあるけど、いちごのような甘い恋というのもあった。題名だけでもすごく考えてつけられていると思います。
- ・ 何でいちご同盟はいちごなのか。それは果物のいちごのように……と一五といちごが組み合わせられている。一つ一つの名にも意味がある。
- ・ 「自殺」というテーマを「生きる」という意味にすることを十五歳の無口な少年にたとえたことでなぜ漢字じゃないのかということが分かった。
- ・ いちご同盟の題名の意味が今になるとよく分かるような気がする。
- ・ やっぱいちご（一五・莓）には意味があってすごいです。
- ・ ただ「一五」と書くのではなく、十五歳とイチゴのイメージを対比させて「いちご」としているところがおもしろい。

【表現】 18

- ・ 大事な時にカットなど意味が分からなかったが、あえて抑えて書いているのがよかった。
- ・ 気持ちの描写が少なかったと思った。気持ちを直接書かずにその場の雰囲気や気持ちを表現するのは難しいと思った。
- ・ どのような心境で、ただ表し方をまっすぐに出すのではなく、遠回しに「～していた」などどのようなふうにして表現するかがよくできるなあ、と思った。
- ・ 主人公の心の動きがよく表れている。
- ・ 少し心情が多いような気がする。いつも必ず主人公が卑屈なことを言っている。
- ・ 書き出しが工夫されていた。
- ・ 会話文がとても多い。
- ・ たくさんメッセージが作品の中に違和感なく自然に入っていて、物語を読み終わった時に、読者の心にいつまでも残る文章になっていた。15歳だからいちご、とてもうまい。
- ・ 気持ちをそのまま表現しない。
- ・ 会話文や地の文を大切にしている。
- ・ 文章中にもところどころ作者の工夫があり、もう一度読むといくつもの気付きがあるかも知れないと感じるようになった。
- ・ 書き出しや書き終わりをとても工夫している。
- ・ 文章の表現やストーリーが時代を超えてよかったと思う。
- ・ 情景描写がよく使われていて、その場の様子を読者に分かりやすくするために工夫している。
- ・ それぞれの人物の心情などが詳しく書かれているので、場面の移り変わりとともに、人物の気持ちの移り変わりがよく分かる。
- ・ 心境も直接書き表すのではなく、行動や描写で表していて、工夫している。
- ・ 書き出し・気持ちの表現の仕方がうまい。
- ・ 一つの気持ちを多方向からとらえ、書くのは難しいものであり、楽しいもの。

無答 7

B 「いちご同盟」以外の小説の気づき 18

- ・ 感情論がけっこう少ない。キャラ設定ができています。
- ・ いちご同盟と同じで、文章の構成がしっかりしていた。
- ・ 自分が持っている本とかでも、風景を詳しく書かれていました。
- ・ 話の内容がややふやになっているものとはっきりしているものがあった。
- ・ 筆者はなぜそう思ったか？や違う世界が舞台のものはどうしてそうなのかを前より考えました。
- ・ いろいろな行動がきちんと理解できる。
- ・ 相手が読みやすい文章がとても自然。
- ・ ありがちな日常の出来事を大切にしている+非現実的なことをまぜる。
- ・ 本屋での本を見るときも見方が変化していくと思う。自分の持っている本でも例えば題名や表紙などを見て工夫などを言えるようになったと思う。
- ・ 「ふがない僕は空を見た」……いろいろな人の視点で書いていてどんどん話がふくらむので、すばらしいなと思いました。
- ・ 「俺の妹がこんなに可愛いわけがない」……まず題名が面白くて挿絵もかわいくて、とても引きつけられるので、よく考えているなと思いました。
- ・ 「～のような」と例え（ティファニーで朝食を 村上春樹訳）。
- ・ 挿絵がないと想像がふくらむ（color）。
- ・ 初めがある場面や音で始まっている小説が多い。
- ・ ライトノベルの欠損は見つけにくい。
- ・ あとで大どんでん返しや伏線をつくることのできる作家は初めから話を組み立ててから書いていることが分かった。それはすごいことだと思った。
- ・ 「マリと子犬の物語」は起承転結がはっきりして、小さい子どもでも分かりやすく感動させてくれる。
- ・ 推理小説などは、むずかしくもない、かんたんでもない、予想が立てやすい問題などが問題になっている。

## 資料4 イメージマップ例

【学習前】

- 「小説」と聞いてイメージすることは・・・ おもしろい、勉強になる、エッセ-集 向田くにこ、さくらもえこ
- 「書く」ということについて・・・ 苦手、めんどうかい



【学習後】

- 「小説」と聞いてイメージすることは・・・ 書く、集中力、発想力、アイデア、忍耐力。
- 「書く」ということについて・・・ 楽しい、新しい発見がある。

## 資料5 「小説と聞いてイメージすることは？ (学習前→学習後)」結果

- A 読むことに熱中できるもの。楽しめるもの。→文の工夫、書き出しや結末がよく考えられて構成されている、面白いもの。
- B 真面目でかたいけどおもしろい…… という不思議なイメージ→書けたらスラスラと書けるけど行き詰まると全く書けなくなる。
- C 色々な作者がいる。恋愛や推理など種類が多い。→無記入 (変化なし)
- D たくさんの登場人物が出てくる。挿し絵がありません、文だけで表現されている。→とても面白い。
- E ほとんど絵がない状態の本→起承転結がある。少なくとも多くても小説。
- F 本、長い、文、小さい本、大きい本→文字がたくさん並んでいて一つ一つに物語がある。
- G 起承転結。ありえないこと (SF的な) →書き手がいれば読み手がいる。共感を得る。
- H いろんなジャンルの本がある。おもしろいものとそうでないものがある。→自分で作れる。短編か長編。
- I 事件などの謎を解いていく→種類が多い (友情・恋愛など)
- J 未提出
- K 絵が少ない。いろいろな会社がある。→難しい。みんなとても上手に書いている。
- L 自分とは別の考え方を教えてくれる、自分の世界を広げてくれるもの→いろんな生き方について教えてくれる。
- M 文字がたくさん並んでいる。楽しいのと楽しくないのに分かれる。一度読んだら最後まで読まなくては行けない。→ (欠席で無記入)
- N 長い、難しい、読みごたえがある、面白い、たくさんの種類がある→読むと心がわくわくしたり感動したりして、読む前の自分を変えることができる。
- O 長い物を書くのと短い物を書いて読んでる人を楽しませたり悲くさせて心を動かす。→変わっていない。
- P 講座は欠席のため、未提出
- Q 事件が起こる。出会いや気付きがある。長い文章。→敵対者。援助者。主人公。
- R 色々な人の価値観を見たり読むこと→独特の世界観。
- S 面白い、勉強になる。エッセ-集→書く、集中力、発想力、アイデア、忍耐力。
- T 楽しいもの。好きな物。人それぞれいろいろあるもの。→書いてて楽しい物。読んでてワクワクするもの。
- U 主人公が中心。ミステリー、ホラー、恋愛、冒険→文章、物語とは違う。いろんな結末と書き出し。
- V フィクション、ノンフィクションなど、いろんな種類がある文章→自分の理想や想像する世界について書かれた文章。
- W 事件などを解決していくイメージ。絵がない→事件 (起承転結がある)。挿し絵とかもある。
- X 推理小説、物語、起承転結、主人公→起承転結。作家、リアリティー、印象。
- Y とにかく面白くて想像豊かにしてくれる。→読んだだけでいろんな気持ちにさせてくれる、魔法のようなもの。
- Z 文字ばかりの文章→楽しい。
- a 文字だけで様々な人間模様や情景、ストーリーが紡がれていて、読んでいくにつれてその世界に入るような感じがする→何でもあり。皆を楽しませることができる。

- b 物語り。自分の中で想像をふくらませて読み進めるもの→人に自分のイメージの物語りを伝える道具。
- c 物語、長い、おもしろい→「起承転結」、中心人物や敵対者、おもしろい。
- d 文章を通して自分の気持ちを遠回りに描くもの。けっこう長くて読むのに時間がかかる。→とにかく書くのが難しい。
- e 未提出
- f 絵が少ない。探偵、推理、長い→現実にあるような話。人の気持ちや様子などを細かく書いているもの。
- g いろいろな物語があって読んだ人が感じることは人それぞれ。→書くのは大変だけど読むのは面白い。いろいろなものがある。
- h 起承転結に構成された本。ストーリー。字ばかりで眠くなる。→楽しいけど悩む。
- i いろんなジャンルがあって、書く人によって視点が違うのすごくおもしろい。→いろんな新しい世界がひらけていく。
- j 長い。ほとんどが起承転結の流れで書かれている。→恋愛、事件、推理などの話書かれている。挿し絵が入っているものもある。
- k 話が長い。→読むと楽しいもの。
- l 読みにくい。→長い。

## 資料6 「書くということについて (学習前→学習後)」 結果

- A 自分の考えることを書くこと。少し苦手な方だと思う。→文の段落の分け方、書き出し、構成を計算して書くこと。
- B むずかしくて大変だけどやってみたいなあ。→自分で書くのが難しい。
- C あんまり最初に構成を考えずに書いてしまう→思っていたより大変。予定していた話と違う話になってしまう。
- D 得意ではありません。それはどんな風に文と文をつなげたら良いのかも分からないし、言葉があまりでてこない。→大変。
- E 微妙だけどやっていると楽しい。→難しい。情景が特に。
- F 苦手。疲れる。→むずかしいが書いているとアイデアが浮かんでくる。
- G 説明を書くのは苦手。気持ちの表現をすることが好き。→面白い。文とかのねじれに気がついて、色々な物を描写するのが好き。
- H 自分の思ったことが書ける。大変そう。文章にするのが少し苦手。→完結が早くなったり遅くなったりする。締め切りまでの時間が意外と苦痛。
- I 文章をまとめたりする。苦手。→文章をまとめ、分かりやすく。
- J 未提出
- K とても難しく、自分には才能がない。→なかなかできない。大変。
- L とても苦手ですけど、少し楽しそうだなと思います。むずかしいけどがんばりたいです。→以前よりは好きになれたと思います。でも難しいです。
- M 「でだし」が大変。それからはスラスラ書ける。おもしろい。楽しい。→欠席のため未記入。
- N とても難しく、たいへんそう→悩む。一本の道筋がある。
- O 自分の思ったこと登場人物の気持ちになって書くというふうにする。→変わっていない。
- P 講座はほは欠席のため、未提出。
- Q さまざまなキーワードを使って物事を文字で表す。→ワード
- R 自分の思いを登場人物にぶつけること→自分と向き合う時間。
- S 苦手、めんどくさい→楽しい、新しい発見がある。
- T 好き。楽しい事。表現方法が一番好き。→自分を表現する事。
- U 言葉に表す。自分で作る。相手に伝える。→楽しいこと。
- V 思いついたアイデアを大切に上手くまとめていく。→苦労するけど、達成感が得られるもの。
- W 続きを考えて書くこと→思ったことをそのまま書く。
- X 得意ではあるが、長い文章になってくると疲れるし、めんどくさくなっていく。→作家は書けない時期があって、その時はつらいけどそれを乗り越えたら素晴らしい作品になる。
- Y 書き始めたら止まらなくなる。→難しい。とにかく難しい。
- Z 会話文と普通の文をどのくらいの比で書いたらいいか分からない→楽しい
- a 文字だけだから簡単そうに見えるけど、多くの努力と時間とアイデアが必要→自分の思ったように色づけることが出来る。
- b 全体をまとめてから書かないといけないので難しい。→組み立てをしっかりとしないとあとで矛盾するので考えてから書くのが大切。
- c 選いので苦手→自分で考えたアイデアをスラスラ書くのはおもしろい。
- d 苦手。難しい。→題材がある時とない時で全く違った物にしががる。
- e 未提出
- f 好きだけど苦手→少し得意になったような感じ。=考えること。表現すること。
- g 自分は本当は苦手。手が痛くなる。でも自分のみにくい感情をぶつけられるのは書くこと。→疲れてめんどくさけどとても楽しい。
- h 手が疲れる、だんだん飽きてくる、力が抜けて寝る、でも楽しい?→難しい、思い通りにならない。
- i あまりやったことがないから知らんけど楽しみ。→すごく難しいけど楽しい。
- j 疲れる。めんどくさい。→小説を書いてみるとおもしろかった。
- k きらい→だんだんむちゅうようになってくる。
- l 書きたくない→表現の仕方が難しい。